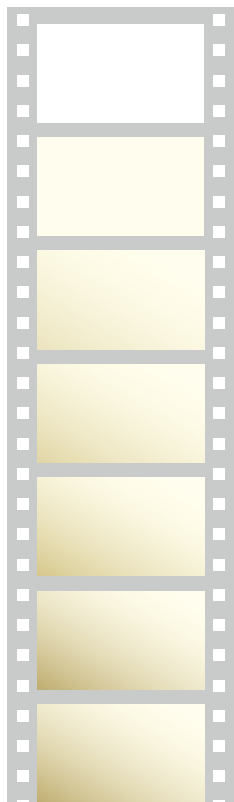
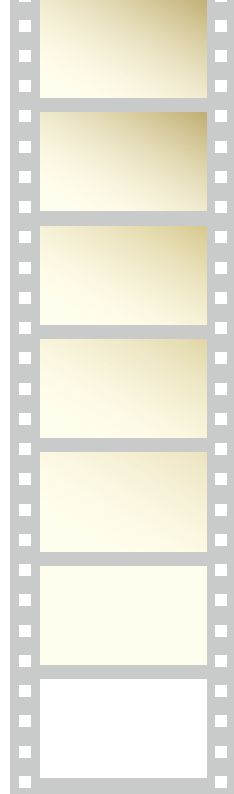


伸^ノさんのシネマトーク

鈴木 伸夫



第七十二回 「ヤキトリ談義」

昭和45年1月末、吹雪で飛ばされそうな青森駅の日本一長いプラットホームをぼくは、駅出口へ向かっていました。

ぼくが青森へやって来た理由は、新年度の卒業生対象の最後と思われるアナウンサー試験が、RAB本社で行われることになったためです。

それを教えてくれたのは、大学の一年先輩で、DJ仲間の先輩であり、すでにRABの新人アナウンサーとして活躍していたOさん^オだったのです。（Oさんは、昭和44年、RABへアナウンサーとして入社。平成25年10月1日現在、常務取締役ラジオ局長です。）

当時Oさんは入社して10ヶ月しか経っておらず、修業中の身で、青森県内の地名に慣れるため、アナウンスの練習用に地元紙の夕刊を手を持っていました。

OさんはRABのアナウンサー採用試験中の一週間、正月出勤した代休を消化することに、その間、大家さんの承諾を得て、ぼくに自分の下宿を提供してくれ

たのです。その下宿は、川沿いにある二階建ての住宅で下が大家さん、上が下宿人で八畳と四畳半の二間（食事なし）の下宿でした。

Oさんは、明日の電車で仙台の実家へ戻るの、下宿近くにあるヤキトリ屋で食事をしながら、青森県のことをいろいろ教えてくれました。その教科書になったのが地元の地方紙だったのです。

「青森県は『むつ湾』『太平洋』『日本海』と三面、海に囲まれ、それだけに事件、事故も多い。一方では独特の文化や芸能も多い。だから「上りネット」（全国ネットのニュースのこと）の回数も多いので、トチらず、しっかり文章を読めなければ、アナウンサーといえないよ」と強調するのです。

Oさん 「YBCへ行ったARアールなんか（大学の同級生でアナウンサー）あれだけフリートークがうまいのに（75年『飛び出せ！全国DJ諸君』という番組でDJ賞を受賞）、ニュースを読んだらメロメロだつて…。アクセントを含め、文章が正確に読めてこそ本物のアナウンサーと言える。だからARも苦勞していると思うよ」

と同級生を心配するとともに、明日、崖の上に立つぼくにもエールを送ってくれて
いるのでした。

(続)

文中敬称略

伸

平成25年12月